

友達の妹が休校でもウザい

休校になった。インフルエンザだか何だかの影響で全国一斉休校らしいが、そんなことはこの理由はどうでもいい。俺にとって大事なのは学校に行かなくていい、すなわち一日の時間をすべて『黒山羊』の作業に使えるという事実である。

晴れた気持ちで朝シャンし、よっしやどの残タスクから片づけてやるっかなーと浮き足立って自室に戻ると――。

「おっはようございまーす!!」

「……何でいるんだよ」

俺の作業用チェアに正座し、昔公園にあった馬の遊具のようにギツコンガツコン動かしているのはマンシヨンの隣の部屋に住んでいるはずの女。親友、小日向乙馬の妹、つまり友達の妹である小日向彩羽だ。

「学校がお休みになったので来ちゃいました! いやあ、一日中くつろげますね☆」

「くつろげますね☆ じゃねえよ。不要不急の外出は控えろって言われてんだろ、帰れ」

「センパイの家は実質私の家みたいなものですし」

「どんな理屈だよ」

「うーん。それじゃあお仕事! 世のサラリーマンは出勤してますし。お仕事なら出かけても

許されますよね！」

「お前のウザ絡みと経済活動を一緒にすんな。世のお父さん達に失礼だろ」

「職業『センパイの部屋に入り浸りガール』な彩羽ちゃんとしては、これも立派なお仕事ってことでいいじゃないですか」

「勝手に迷惑な仕事を作んな。ほれ、本当の仕事をすんだからそこのけ。しっしっ」

「んにゃ!? ちょ、もう、くすぐったいんですけど!？」

風呂上がりに持ってきたミニタオルを猫じゃらしみたいに振ってやると、鼻をくすぐられた彩羽が悶えながら椅子の上から退避した。

「もー！ すぐ邪険に扱って！ こーなったら私にも考えがありますよっ！ 全身全霊で濃厚接触してやりますからね!!」

「だああああもうウザい！ せっかくの休校なんだから、俺に仕事をさせてくれーっ！」

風邪も引かず元気なのは何よりだがもっとうバランスを取ってくれねーかなーと神様に願いながらも叶うはずもなく、結局今日の進捗は普段と比べて15倍程度だった。

登校せず一日中仕事に集中すれば3倍の生産性だと思っただが、意外とうまくいかなあ。